

## 第9回 マネジメントセミナー開催

### 「世界の若者たちと日本企業」

次代を担う留学生の熱気

H18.1.26 情報文化センター

講師：アジア太平洋国際大学 学長 モンテ・カセム氏

情報文化センターにて第9回マネジメントセミナーが開催された。講師は大分県別府市の立命館アジア太平洋(APU)大学の学長で、学校法人立命館大学副総長のモンテ・カセム教授。APUは「自由・平和・ヒューマニズム」、「国際相互理解」、「アジア太平洋の未来創造」を理念に2000年4月に開学。03年度には75カ国・地域から1,800人の留学生と2,300人以上の国内学生と一緒に学ぶ国際性あふれるキャンパスとなっており、留学生の日本企業への就職率が100%となっている。会場には産業人はもちろんのこと、大学関係の方が多数来場し、カセム氏の講話に熱心に耳を傾けていた。

冒頭、高橋会長から「一度、APU に行った事があり、留学生に感化される日本人学生をみて頼もしくなった。日産でも外国人が多く、彼らが日本の産業界に与える良い影響を積極的に考える機会としたい。」とあった。



企業同様、大学でも国際的競争時代によるパラダイムシフトの時代が到来しており、ジョブホッピング、成果能力主義等、企業の人材育成方策の見直しに大学側も対応しなくてはならない。

Awareness(認識) Adaptability(適応能力) Action(行動力)は今後の人材育成の3Aであり、次代を読む力をつける教育、急速に変容する世の中の対応が必要とされる。

日本の大学の致命的な欠陥は教授会編成で、経営、組織力が脆弱であること。APUも日本型大学経営から卒業すべく、更なる発展に向けAPUニュー・チャレンジ計画を推進。第1に学部を増やさず入学、収容定員の1,000人増に加え、受入れ地域増加を予定。第2に2006年度に観光系、環境系、国際戦略系、IT系、言語系の5つの分野で学士課程から修士・博士課程までの教育体系を備え、学部横断的な内容の教育・研究を行なう「インスティテュート」組織を創設。現地参画型・臨地学習を行なう「グローバル・アクティブ・ラーニング」として「知識」の習得に加え、実践的学習や体験を重視したプログラムとしている。いずれも1・2年次で教養、3年次で技術力、4年次で現場力を習得する。個人的には日本が長年培ってきた「ものづくり」を大切にしたい。

今の日本には何が足りないか。それは“勇ましく生きる”事であると思う。APUでは各国の留学生が日本人学生に失敗を恐れない勇ましさ、行動力という元気を与えている。「変容への創造的な対応」「構想を行動力へ」が重要である。このAPUの異文化環境で培われた学生の積極性が企業に高く評価されているのである。

それに加え、私は学生にいつも「枠を越えて考える」ことをお願いしている。私は荒れた熱帯雨林・生態の復元も研究している。巨大な熱帯雨林の樹木にイチジクがある。イチジクは自分に栄養をくれた親の木を絞め殺すまで育つ。人間の感覚では残酷極まりないが、自然界では違う。実をつけたイチジクは哺乳類や鳥の栄養源になるのである。この残酷なサイクルを繰り返すことによって熱帯雨林の豊かさが保たれる。

このように視点を変えて考えること、発見する

事が大切であり、これは現場に行かないと分からない。健常者も怪我をしたら、いつでも障害者に成りうるし、高齢者はマイナーな障害が複数あることである。このように考え方を換え、技術力がその架け橋になれないか。このインスピレーションと創造性を磨く事が我々の教育の目指すところである。

技術を文化、知識、言語、現場、環境、福祉と照らし合せたら、様々な事が可能になる。

日本で65歳以上の個人資産の計が約80兆円以上と言われている。この方々を対象にものづくりをすれば市場が小さすぎる事は無い。

これを可能にするため、大学と企業のジョイントベンチャー制を作り、技術力を駆使しユニバーサルデザインを中心に現場力をつけたい。

企業は常にイノベーションのシーズを出すような現場をつくり、大学の中立性（商品のスペック、マーケット調査）を必要とする時に利用し、お互いの専門性、役割を分担した方が良い。

グローバル人材の最終到達点は理性と感性、

知識と直感である。先ほどの熱帯雨林の復元の話になるが、こうしたら復元するというのは分かる。How toは簡単で、中核になる生物種を探し、定着するまで育成する。樹木とイチジク、この2つの食物連鎖の繋がりさえあれば、自然に回復をする。しかし何故かは分からない。だからこそ現場力は大事なのである。このようなグッドプラクティスの例を創ったり、グローバルスタンダード設定での応援団が大学であり、そこを企業がどう活用するかである。

私はアルキメデイスの「立つ場所と棒があれば世界を動かす」という精神が好きである。立つ場所はインスティテュートであり、棒は技術力と教養の広さである。

ありとあらゆる事は小さなアリから学べる。アリが物事を開拓するから資源が循環をする。アリは自己体重の40倍の物を運ぶが、人間には到底無理である。「アリと同様に己を知り謙遜し、多少背伸びをして頑張ってくれ」というのがAPUの人材育成の希望拡大計画である。